

私の推薦する図書

読書のススメ — 古典から学ぶ —

経済学部長 栗原 裕

学部学生時代には本を読む機会が多くあったが、大学院時代には、研究分野以外の本を読むことはほとんどなかった。しかし、年月が経過するにつれ、専門分野のみならず、専門外の分野の書物から啓発されることが度々ある。

経済学の分野に限らないが、研究の高度化は、専門化、細分化の方向に進んでいるのは否めない事実である。それは、否定すべきことではなく、利点もあるけれども、視野、視点を広く持ち、透徹した考察、洞察力をもって、獲得した専門的知を本来あるべき人間的知に高める努力をすることは、大学人にとっての務めである。国際化、複雑化、そして多様化する世の中は、特にこうした視座と姿勢を求めている。

お勧めしたいのは古典である。普通の講義はもちろん、私が専門とする分野に関して読む文献は高度にテクニカルな論文や書物が中心である。現実の社会と古典とは乖離したイメージがあるかもしれない。けれども、古典という情報は皆に平等に提供されており、思索の素となる要素が多分に含まれている。時には少し下がって、謙虚に、素直に古典と対峙することによって、鳥瞰的に物事を見る習慣が醸成され、ひいては、人格と見識の形成につながることになる。古典を前にして自己を振り返ると、心もとなく、かつ恥ずかしく感じるが、古人に倣い、よりよく生きるための知性を高める情熱だけは一生失いたくない気持ちになる。そして、古典から現実の世界に戻ったときに正しく普遍的な判断、行動ができるような“人柄に支えられた知”が培われるであろう。

若い世代にぜひ読んでもらいたい本を何冊

かあげようと思ったが、どうしても数十冊になってしまう。そこで今年の夏休みに再読した本のうち、比較的若い世代に読まれやすい、経済関係以外の書物をあげることにしよう。

カント『道徳形而上学原論』

シェイクスピア『ジュリアス・シーザー』

鈴木大拙『東洋的な見方』

道元『正法眼蔵』

* * * * *

小坂井 澄著 『人間の分際』

国際コミュニケーション学部長 田本 健一

2008年夏のある日、筆者の大先輩である、秋田聖霊女子短期大学副学長佐藤栄悦先生から封書が届いた。手紙には、先生ご推薦の著書が数点、解説とともに記されていた。

そのうち、先ず筆者の目を惹いたのは、『人間の分際』と題した書物であった。これは、岩下壮一神父（1889・9・18～1940・12・3）の一生を綴ったものであり、彼が何故名誉も財産も捨ててハンセン病者の友となつたのが書き連ねたものである。

本著では、また、哲学的、思想史的、宗教学的、西洋言語・文化論的、そして日本近・現代史的観点のいずれにも関わる記述が網目のように展開されている。フランス語、英語、ドイツ語、ラテン語に長け、大学では哲学を専攻し、宗教においても常に思索を重ね、フランス、イギリス、イタリアと3年間に亘る留学の末、遂には神父に叙階された岩下壮一を論ずるには、そのような広範な視野から記述されなければならないのであろう。その道の全くの素人である筆者が、受け身とはいえ、宗教的、哲学的、思想史的思考のまねごとは